

文春文庫

我が老後

佐藤愛子



文藝春秋



文春文庫

わ が ろう ご
我 が 老 後

定価はカバーに
表示してあります

1997年3月10日 第1刷

1997年11月30日 第3刷

著 者 ^{さ どう あい こ} 佐藤愛子

発行者 新井 信

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-745002-X

文 春 文 庫

我 が 老 後

佐藤愛子



文 藝 春 秋

目次

犬は犬として生きよ 8

我が闘い 17

敗北の時 31

ピとプー 42

ええ加減にせえ！ 53

ピープーの次はグー 63

日々これ闘い 74

グーの次は孫 85

またもとの一人 94

お正月の過ごし方 105

ああ六十八歳 115

ボケ仲間 125

撮影の日
136

オニばあさん
146

珍友
154

孫は敵だ！
164

我が家は保育所
174

可哀そうの歌
187

いつもと同じ朝
198

單行本 一九九三年六月 文藝春秋刊

我が老後

犬は犬として生きよ

十一月がくれば私は満六十七歳になる。私が老いたのと同じように、我が家の二匹の犬も年老いた。特に十一歳になるメス犬のチビは、口のまわりに白い毛が混り、もともと茶色の犬なのに胴体が黒くなってきた。顔にも黒い毛が生えてきて、茶色やら黒やら白やら、色々混って何ともいえない風采の上らないショボショボした犬になっている。スピッツ系の雑種なので毛が長くて柔らかい。その柔らかい毛が風に吹かれると片側になびいて、痩せて貧弱な骨格があらわれる。寒い時分、木枯の中にショボたれて、見るからに寒そうに庭からじっとこっちを見守っている姿を見ると、憐れというか情けないというか、見るに耐えぬという気持ちになってくる。

何という不細工な犬なのだろう。いや、若い頃はこんなじゃなかった。だんだん醜くなっていく。口もとが尖ってきて、目はいつも訴えかけるように真剣にこっちを見ている。

「なんでこっちはかり見てるんだ！」

と私は怒りたくなる。

チビは食いしんぼうなのである。いや、年をとるに従って食いしんぼうになってきたのだ。居間のテーブルに向って食事をしていると、庭からジーツと見ている。去年の秋、娘が結婚して家を出たので私は一人暮らしである。昼食は家事手伝いの人と一緒にとるが、手伝いの人は夕刻になると帰るので、夕食は一人である。今は日が長いので明るいうちに夕食をとることになる。食べながらふと庭を見るとチビが物欲しそうにこっちを見つめている。

「あんた、ゴハン食べたんでしょ

と私はいう。

「あんたにあげるものは何もないよ」

そういうとチビは耳を後ろへ寝かせ、犬のニコニコ顔（おべっか顔）を作ってガラス戸にすり寄ってきて、尚マジマジと私を見つめる。私は不愉快だ。

「不愉快だよ、チビ」

という。チビはニコニコ顔で身体をゆする。

「タローを見なさいよ、タローを」

タローは迷い犬が居ついてもう六、七年になるオス犬だ。放浪していた犬なのにチビ

のように食いしんぼうでない。私の暮しとは関係なくそのへんに寝たり、起き上って吠えたり、チリ紙交換の呼び声に呼応したり、鳩を追いかけたり、堪能してまた寝たり、そっちはそっち、こっちはこっち、というふうに暮している。私はそんなタローが好きなのである。

「犬は犬として生きよ」

それが私の犬への提言である。

犬は自由であるべきだ。犬は人間の慰めとして存在しているのではない。だからそう人間の機嫌をとる必要はないのだ。

「毅然^{きぜん}と生きよ、悠々と生きよ」

私はチビにそういたい。

チビは私が草むしりをしようと庭にしゃがむと、忽ち^{たちま}飛んできて飛びかかり、私に乗りかかってペロペロ顔をなめにくる。それがしつこいのだ。たいていの犬は飼主への一応の愛情表現（ご挨拶）としてペロペロをやるが、ひと通り終わると引き下っていくものである。ところがチビはキリがない。草むしりをしている間中、ペロペロしつづけるのだ。

「エイ、もう！」

私は怒り、チビをふるい落すために立ち上る。チビはペロペロ中毒であるばかりでなく、泥足で飛びつく中毒でもある。前から飛びつくと思はれるから、専ら後ろを狙う。そのために草むしりをする時は着替えをし、覆面をしなければならぬ。庭に出るのが億劫おっくうになってしまった。

要するにチビは犬の「ひつつき虫」なのである。いつも人間にくつついていたいのだ。少しでも、五十センチでも三十センチでも人間の近くにいたいらしい。氷雨の降る日など、ガラス戸の嵌はまっている敷居の上に乗って——といっても五センチもあるかないかの狭いところなので、ぴったり身体をガラス戸にくつつけて、顔は横向きのまま必死の横目でこっちを見ている。マッチ売りの少女じゃあるまいし、と私はムカムカする。なんという憐れっぽい姿を見せるのだ！ なぜ自分の小屋へ行かない！ タローも小屋に入らないが（放浪していたせい）、その代り縁の下の土を掘って悠々と雨を眺めているではないか。

こういう話をするとう世の愛犬家は、私の薄情さを憎む。

「そんなに慕っている犬をどうして可愛いと思えないんでしょう！」と非難する。まったくその通り、私も自分で自分をそう非難している。非難しているが、あの物欲しげな横目。うるさいペロペロの機嫌とり。それに食いしんぼう！ チビを連れて散歩に出る

と、小学生がいうのだ。

「やあ、キツタねえ犬！」

私はムツとする。チビを憐れに思う心とムツとする心とが交錯して、散歩に出るのがイヤになる。

いつも邪慳じやくんにしているので今日はひとつ気前のいいところを見せてチビを喜ばせてやろうと、上等のカステラをぶ厚く切ってタローとチビに与える。タローは放浪する前に飼主から教えられていたとみえて、食物を与えようとするときちゃんとお坐りをして、「お手」ともいわないのに泥のついた大きな前足を不器用につき出す。カステラを貰うとくわえて庭隅へ行つて、食べている。

ところがチビめはとにかくひと呑みだ。あつという間だ。

「お前はウワバミか……」

上等のカステラなのだ、もっとよく味わって食べろと私はいいたい。だがチビは「あとは？ あとは？」というように浅ましく目を光らせて私の手もとを見つめる。タローは向うの植込みの蔭でのんびり食べているというのに。仕方なくもう一切れやろうとすると、忽ちガツガツ飛びついて、私の手まで噛かむ。

小さい頃からチビはとても賢い犬だった。内玄関のガラス障子を開けるばかりか、表

のくぐり戸の扉も開けた。内側から開ける時は前足を取手に掛けて下へ押し下げ、それから手前へ引く。外から開ける時は前へ押しやるようにして開ける。そして勝手に散歩に出かけ、閉めておいても開けて入ってくる。名犬映画に出せば囚われの主人公を救い出す場面などで天晴れ名犬の名をほしいままにすることだろうなどと、この私も感心していた頃があったのだ。

だが今はそんな技が私には小シヤクなだけだ。

「ママはどうしてチビに邪慳にするのよ？」

と娘は私を非難した。

「チビとタローと平等にしてやりなさいよ」

「してるよう」

といいながら、二つに割った饅頭をこっそり見較べて、大きい方をタローにやっている。そして「チビが死んでしまったら、その時はきつと後悔に胸を噛まれるにちがいない……」とひそかに思っているのだ。そう思いつつ依怙贖肩をしてい

チビはタローが来てから、ひつつき虫の出しゃばりの、ペロペロ中毒の食いしんぼうのウワバミになったのだ。私にはそれがわかっている。わかっているが許せない。チビは家族の愛情を独占したいのだ。(それがイヤらしい。)独占したい一心で、片時も油断

せずに我々の動静に注意を払っていて、タローが近づいてくると寄せつけまいとして立ちほだかるのだ。私はカッとして、

「こらッ。タローを虐めると承知しないぞ！」

怒鳴って殴る。それを見て娘がいった。

「チビが死んだら後悔に胸を噛まれるんでしょ？ それでもいいの？」

「うーん、く、くるしい……」

と唸りつつ、私は飛びついてくるチビをまた殴る。今はチビはどうやら私から殴られることを喜んでいいる風があり、私は叫ぶ。

「お前はマゾか！」

そうして季節は今、夏を迎えんとしている。十年来、今頃になると藤棚に巣を造っていた鳩が、今年は巣を造りかけたまま姿を見せなくなった。毎年来ていたあの鳩も年をとって卵を孵す^{かえ}元気がなくなってしまったのだろうか。毎年、鮮かな紅色の花を咲かせていたぎくろも、去年から花をつけなくなった。植えた憶えはないのに勝手に根づいたあじさいが、青い花を咲かせている。娘は嫁に行き私の暮しは「一人二匹」の暮しになった。白内障が進んで、朝のひと時、新聞を読む時間がだんだん短くなっていく。チビと私は十一年一緒に暮し、共に老いてきた。老いた者同士、仲良く暮していこうと私は

思い直す。一所懸命チビにやさしくしようと思いきめる。

そんな朝、庭に目を放つと、チビがタローにすり寄っているのが見えた。いつもなら私が居間のテーブルにいる間は、ガラス戸のそばに来て瞬きもせず^{まばた}に私の動静を窺^{うかが}っているのに。

チビはタローをなめてやっている。タローに乗りかかり、しきりに誘いをかけている。梅雨の合間の、雨氣^{あまけ}を含んだ風に白い髭をそよがせながら。

「チエッ！」

私は視線を逸^そらし、新聞に目を凝らす。いつもはタローに冷たく当たっているくせに、勝手な時ばかりイチャイチャして……。

チビが何回もタローの子を産むため、タローはついに去勢手術を受けた。だからチビの誘いにタローは困惑気味でいる。よろよろと逃げるのをチビは追って執拗にまといつく。白髭を風になびかせて。

私はすつくと立ち、グワラリとガラス戸を開け、

「チビッ！ いい加減にしなさいッ！」

怒鳴ろうとして、見た。タローがチビの上に乗るかかっているのを。チビの執念が勝ったのだ。